飛鳥寺出土文字瓦の再調査

1　調査の経緯

飛鳥寺は崇峻天皇元年（588）創建の日本初の本格的寺院であり、その瓦生産には、百済から渡来した瓦工人が深く関与したことが文献、考古資料から確認されている。飛鳥寺の発掘調査は1956・57年の中心伽藍の調査以降、奈文研が継続的に進めている。

これまで、飛鳥寺からは、ヘラ描き文字瓦（以下、文字瓦と表記）の出土が報告されている（『飛鳥寺報告』など）。そのうちの数点について、東野が釈読の可能性を指摘し[1)]、2015年１月７日、狭川真一氏（公益財団法人元興寺文化財研究所）とともに、東野、清野、山本が奈文研飛鳥資料館において調査を行った。現在、飛鳥寺出土資料の再整理を進めつつある同館では、未報告の文字瓦の存在を把握していたため、調査には同館の協力を得た。以下、既報告のものと合わせ、おもに釈読可能なものを図70に掲げ、その内容を報告する。

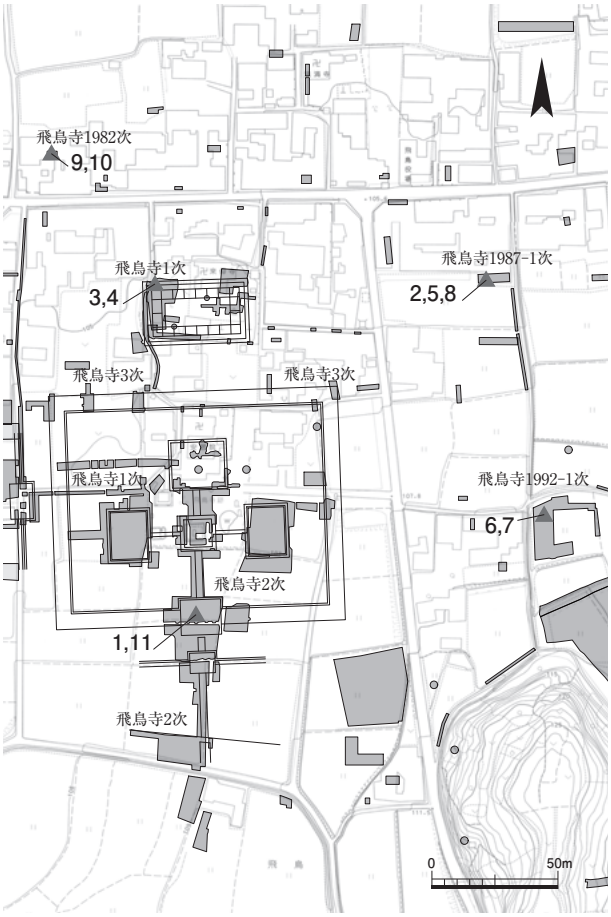

図69　文字瓦の出土位置　1：3000
番号は本文、釈文および図 70 中の番号と対応。１、11 はおおよその出土位置。

2　文字瓦の内容

１（番号は釈文および図69・70中の番号、以下同じ）は平瓦凹面に文字を刻む。「多」「名」の習書。「多」から徐々に「名」へと変化する。

瓦の色調は暗赤褐色を呈し軟質である。胎土はやや粗く砂粒を多く含む。凸面はタテナデないしタテ削りにより完全に叩き目を消す。凹面は摩滅のため状態が悪いが模骨痕、布圧痕が見える。側面は凹面側の分割截線を残すが、凸面側の分割破面を粗く削る。側面や凸面の調整の特徴は飛鳥寺創建期の平瓦と共通するが、凸面の叩き目が不明であるため断定しがたい。第２次調査、中門出土（『飛鳥寺報告』35頁、第18図）。

２は平瓦凸面の狭端側縁付近に、僧ないし僧都にかかわる文言を刻む。「僧都」ならば、僧綱の一つか。推古朝に鞍作徳積を僧都に任じたとみえ（推古紀三十二年四月壬戌条）、日本霊異記によると、同じく大部屋栖（野）古も僧都に任じられたという（上巻第五縁）。このほか、七世紀の僧都は、天武天皇二年（673）十二月の少僧都義成（天武紀同月戊申条）、文武天皇二年（698）三月の少僧都智淵（続日本紀同月壬午条）、十一月の大僧都道昭（僧綱補任抄出）が知られる。

瓦の色調は淡茶褐色を呈し硬質である。胎土はやや粗く、直径0.5㎝以下の砂粒を多く含む。凸面は粗い斜格子叩きで、格子目は平行四辺形を呈し1.5㎝、1.2㎝ごとに刻む。一部、布圧痕が着く。凹面はほぼ未調整で模骨痕、布圧痕、糸切り痕を残す。模骨の枠板幅は2.5～3.0㎝。側面にヘラ削りをほどこし、分割破面と分割截面を残さない。凹凸両面との間に面取りをほどこし、凹面の側縁寄りにさらに幅1.5㎝のヘラ削りをほどこす。製作技法の特徴から、７世紀後半のものか。1987-1次調査出土（『藤原概報19』）。

３は平瓦凸面に文字を刻む。「白髪部」は、瓦の製作にかかわった工人の集団名ないし氏族名か。「白髪部」は、清寧天皇の名代で（雄略記、清寧記、清寧紀二年二月条、継体紀元年二月庚子条）、延暦四年（785）五月、白壁王の諱を避け、白髪部を真髪部と改めた（続日本紀同月丁酉条）。よって、真髪に類する郷を和名抄に検じると、摂津国島上郡真上郷、駿河国有度郡真壁郷、常陸国真壁郡真壁郷、

上野国勢多郡真壁郷、下野国芳賀郡真壁郷、同国河内郡真壁郷、備中国窪屋郡真壁郷がみえるほか、「(摂津国)三嶋上郡白髪部里」(『平城宮木簡七』一一三〇〇)、「備中国窪屋郡白髪部郷」(天平十一年備中国大税負死亡人帳。正倉院文書)が知られる。また、正倉院文書や木簡など奈良時代以前の史料にみえる白髪部の分布は、山背、尾張、三河、遠江、伊豆、安房、武蔵、上総、美濃、越前、備中、伊豫、筑前に確認される。なお、現在のところ、一次史料でもっとも古い白髪部の史料は、奈良県飛鳥京跡第51次調査から出土した「白髪部五十戸皮十口」と記した木簡であり、共伴した「大花下」と記された木簡や土器の年代観から、7世紀中頃から7世紀後半までの遺物と理解されている[2]が、本例はこれと同時期の史料となる。

瓦の色調は淡褐色から灰褐色で硬質である。胎土は密で砂粒を少量含む。凸面は丁寧なヨコナデをほどこし、一部、タテナデないし削りをほどこすが、一部に格子叩き目が残る。格子目は深く太い(幅0.3㎝程度)刻線と浅い(幅0.1㎝弱)刻線が直交し、約0.5㎝間隔で刻む。凹面はやや粗くタテ削りをほどこすが、多くの部分で布圧痕、糸切り痕が残る。側面にヘラ削りをほどこし、分割破面と分割截面を残さない。凹凸両面との間に面取りをほどこす。製作技法の特徴から、7世紀後半のものか。第3次調査、講堂出土(『飛鳥寺報告』35頁、第18図)。

4は平瓦凹面、5は平瓦凸面に文字を刻む。「女瓦」はいわゆる平瓦のこと。「女瓦」は飛鳥池工房遺跡から出土した7世紀末頃とみられる削屑の記述が知られ(『飛鳥藤原京木簡一』九九六・九九八)、これより遡る可能性のある当該資料は、女瓦と記した最古級の出土文字資料といえる。

4の色調はやや青みがかった灰色を呈し硬質である。胎土は密で砂粒をわずかに含む。凸面は丁寧なタテナデをほどこすが、わずかにナデが及ばない部分に布圧痕が残る。いわゆる凸面布目平瓦である。凹面は丁寧にナデをほどこす。側面は凹凸両面から幅1.5㎝程度の深い面取りをほどこして剣先形に仕上げ、分割破面と分割截面を残さない。

花谷浩は、飛鳥寺出土の凸面布目平瓦について、天智天皇十年(671)に天智天皇が法興寺の仏に施入した記事があり(天智紀十年十月八日条)、川原寺同笵の軒丸瓦XⅡ型式、四重弧紋軒平瓦、凸面布目平瓦など、川原寺から持ち運ばれたと判断できる一群の瓦がごく少量あると指摘している[3]。本例も川原寺から持ち運ばれたものと考えられ、年代は川原寺創建期(7世紀後半)に位置づけられる。第3次調査、講堂出土(『飛鳥寺報告』)。

5の色調は灰色で硬質である。胎土は密で直径0.2㎝以下の砂粒をやや多く含む。凸面は斜格子叩きののち粗くタテナデをほどこす。格子目は菱形で一辺約1.0㎝、約70度で交差する。凹面は粗くタテナデをほどこすが、糸切り痕、布圧痕が残る部分が多い。側面にヘラ削りをほどこし、分割破面と分割截面を残さない。瓦の厚さは1.3㎝程度であるが、凹面側の一方に幅1.0㎝、もう一方に幅1.7㎝、凸面側に幅0.3〜0.6㎝の面取りをほどこすため側面幅は1.0㎝程度しかない。凹面の狭端縁に幅1.2㎝のヘラ削りをほどこす。製作技法の特徴から、7世紀後半の飛鳥寺改作時のものと位置づけられている[4]。1987-1次調査出土(『藤原概報 19』)。

6は平瓦凸面側縁寄りに文字を刻む。「飛」は、飛鳥寺の意か。僧名を列記し「飛」と注記した木簡が知られ(『藤原宮木簡一』四四九)、これも飛鳥寺を意味し僧の所属を示すものと思われる。7には「乙」の筆画がみえ「飛」の一部とも考えられる。もと同一個体とすれば、「飛」の習書である可能性があるか。

6・7は直接接合しないが胎土・色調・調整の特徴が一致し、出土位置も同じであるため同一個体の可能性が高い。いずれも凸面が暗褐灰色、凹面が暗茶灰色を呈し硬質である。胎土は密で直径0.3㎝以下の長石を多く含む。凸面は丁寧なナデをほどこすが、7はわずかに平行叩き目が残る。凹面は未調整で布圧痕、模骨痕を残す。側面は、分割破面にヘラ削りをほどこし、分割截面を残すと考えられるが、明確でない。凹面側に幅1.0㎝程度の面取りをほどこす。凸面の叩き板の特徴、凹凸面の調整、胎土、色調については、飛鳥寺創建期の平瓦に共通した特徴をもつものがあるが、側面調整の特徴は創建期のものと異なる可能性も残るため断定しがたい。いずれも1992-1次調査出土(『藤原概報 23』)。

8は丸瓦筒部凸面狭端寄りに文字を刻む。色調は暗灰色を呈し硬質である。胎土は密で直径0.3㎝以下の長石を多く含む。凸面は全面に丁寧なタテナデをほどこすが、わずかに格子叩きまたは斜格子叩きが残る。凹面は未調整で布圧痕、糸切り痕を残す。側面はヘラ削りをほどこし、分割破面と分割截面を残さない。凹面側は幅1.2

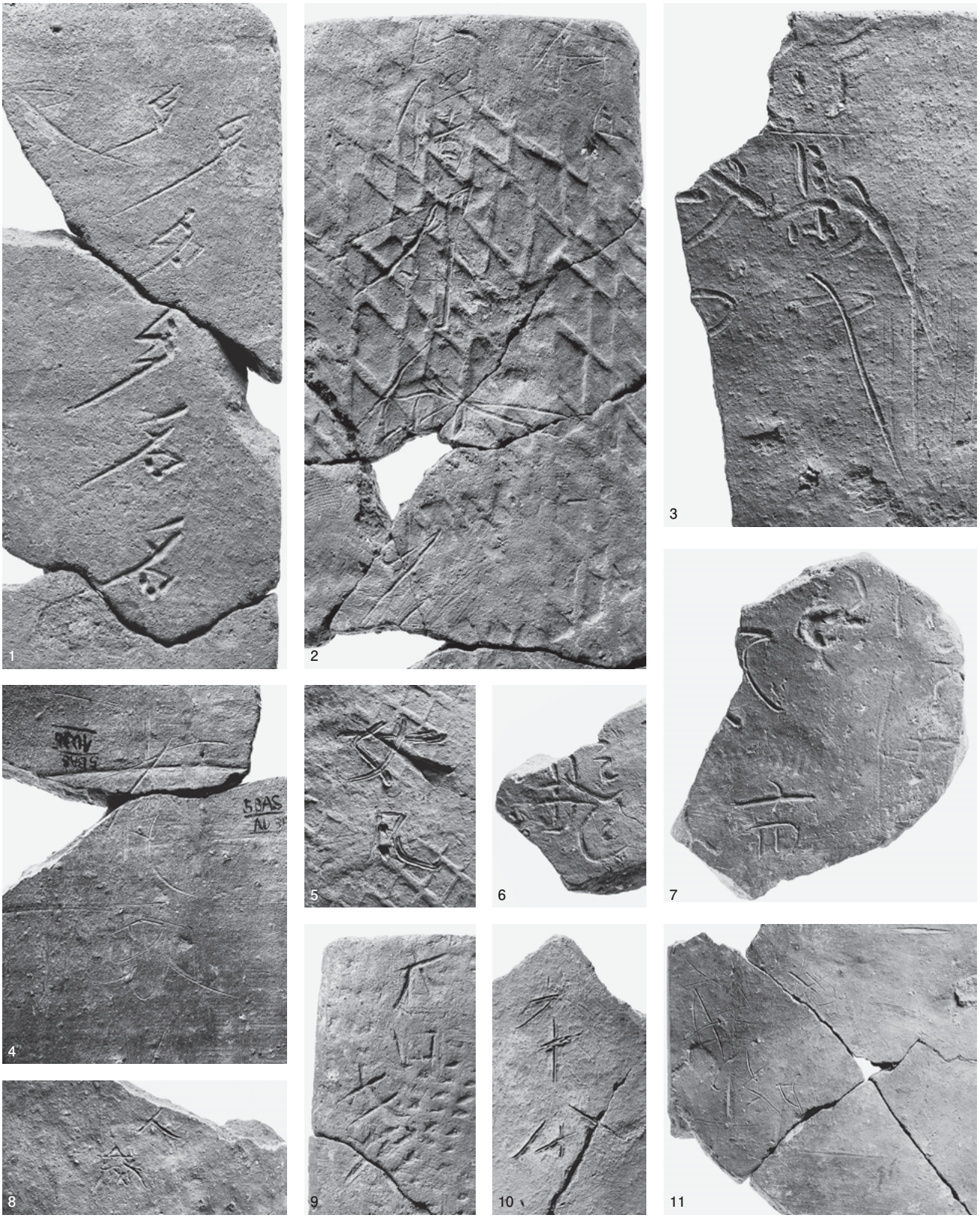

図70　飛鳥寺出土ヘラ書き瓦

番号は本文中の説明、図 69 の出土位置、釈文の番号と対応。

飛鳥寺出土文字瓦釈文

1　多　多　多　名　名

2　□〔会少ヵ〕止僧都□□

3　白髪部□□〔髪部ヵ〕

4　女瓦□

5　女瓦

6　飛

7　□□□□

8　人□

9　〔六口ヵ〕□□◇

10　六十□

11　□□

～1.5㎝、凸面側は幅0.5㎝程度の面取りをほどこす。凹面側の面取りが広いため、側面幅は0.7～0.8㎝程度である。製作技法の特徴から、７世紀後半かそれ以降のものであろう。1987-1次調査出土（『藤原概報 19』）。

９は、平瓦凸面狭端の側縁付近に文字を刻む。明茶褐色を呈し硬質である。胎土は密で直径0.3㎝以下の砂粒を多く含む。凸面は格子叩きののち粗くタテナデをほどこす。格子目は約0.6㎝ごとに刻む。凹面は粗くタテナデをほどこすが布圧痕、糸切り痕を残す。側面はヘラ削りをほどこし、分割破面と分割截面を残さない。瓦の厚さは1.7㎝であるが、凹面側に幅0.5～1.0㎝、凸面側に0.6㎝の面取りをほどこすため、側面幅は1.3㎝程度である。凹面の狭端縁に幅1.5㎝程度のヨコナデをほどこす。製作技法の特徴から、７世紀後半のものであろう。1982年度Ｃ（寺域西限付近）調査出土（『藤原概報 13』）。

10は行基式丸瓦凸面の狭端から16.0㎝付近に文字を刻む。色調は淡茶褐色で硬質である。胎土は密で直径0.2㎝以下の砂粒を少量含む。凸面は丁寧なナデをほどこし叩き目を完全に消す。凹面は未調整で糸切り痕、布圧痕が残る。側面にヘラ削りをほどこし、分割破面と分割截面を残さない。凹面側の側縁に幅0.8㎝の面取りをほどこす。筒部側面の狭端付近には分割のヘラ切りが届かない。狭端面は丁寧な調整がほどこされず、凹凸が残る。製作技法の特徴から、７世紀後半のものであろう。1982年度Ｃ（寺域西限付近）調査出土（『藤原概報 13』）。

11は平瓦凸面に文字を刻むが、様々な方向の文字があり、釈読できない。

瓦の色調は灰色で硬質である。胎土は密で砂粒は少ない。凸面はヨコナデを丁寧にほどこすが、平行叩き目、または直交する格子目の一方の刻みが浅い格子叩き目と思われる痕跡がごくわずかに残る。凹面は未調整で粘土板継ぎ目、全面に布圧痕、模骨痕を残す。側面にヘラ削りをほどこし、分割破面と分割截面を残さない。凹面側に幅0.5㎝、凸面側に幅0.3㎝の面取りをほどこす。狭端縁の凹凸面にヘラケズリをほどこす。製作技法の特徴から、７世紀後半のものであろう。第２次調査、中門出土（『飛鳥寺報告』35頁、第18図）。

３　まとめ

今回報告した文字瓦の多くは、７世紀後半、あるいはそれ以降とみられるものである。ただし１・６・７については、断定しがたいものの飛鳥寺創建期の可能性も考えられる。習書ないしその可能性があるものが多い点も注目される。今後、年代を特定し得る類例の増加を待って、さらに検討を加えたい。

３の「白髪部」は、瓦生産に関わった工人の集団名ないし氏族名とすれば、飛鳥寺の造営にともなう労働編成の在り方を考えるうえで興味深い。

また、平瓦を指す「女瓦」の文字を刻んだ４・５は、いずれも７世紀後半のものであり、「女瓦」と記した最古級の文字資料と位置づけられる。

（清野孝之・山本　崇・東野治之／奈良大学文学部教授）

註

１）東野治之「飛鳥時代の文字瓦二題―飛鳥寺と中宮寺のヘラ書瓦―」『史料学探訪』岩波書店、2015。
２）岸俊男「「白髪部五十戸」の貢進物付札」『日本古代文物の研究』塙書房、1988（初出1978）。
３）花谷浩「飛鳥寺・豊浦寺創建の瓦」『古代瓦研究 Ⅰ―飛鳥寺の創建から百済大寺の成立まで―』奈文研、2000。
４）花谷浩「鐙瓦考」『研究論集 Ⅸ』104頁第３図、奈文研、1991。